

Orthographia Gallica

— ガリア語正綴法 — 訳述

福井秀加

中世イングランドにおいて最も普及したフランス語教科書と見做されているのは14世紀前半に作成された *Orthographia Gallica* である。正綴法であるから、教本には主として語の綴り方、発音が示されているが、本文は複数の作り方や動詞の人称変化、活用、前置詞、冠詞、代名詞、形容詞、副詞の扱い方などにも言及し、論述は統語論、文章法にも及ぶ。しかし教本の随所にアングロノルマン語の特徴を持った綴りや、曖昧な文法の記述が見られるのは事実である。それらはとりもなおさずノルマン征服以後数世紀に亘りイングランドで使われていたアングロノルマン語 (AN) の実態を示している。

AN についての貴重な研究書を出版した M. K. Pope 博士の大著 *From Latin to Modern French with Especial Consideration of Anglo-Norman*, Univ. of Manchester, 1934, rept. London 1966. には AN の詳解に際して *Orthographia Gallica* より数多い引用がなされている。(cf. M. K. Pope 「アングロノルマン語」英語学ライブラリー(67) 大高・福井 訳述, 研究社, 1984 第3版)

本稿は *Orthographia Gallica* を翻訳して、アングロノルマン語の実態を示す個所や、曖昧なところ、明らかな誤りの個所には注釈をほどこした。翻訳は J. Stürzinger ed. *Orthographia Gallica: Ältester Traktat über Französische Aussprache und Orthographie*, Altfranzösische Bibliothek 1884, VIII, rept. Wiesbaden, 1968. を基としている。

編者の Stürzinger は *Orthographia* の刊本を作成するに際し、現存する4写本、即ち BL. MS Harley 4971, Cambridge Univ. Library MS Ee. 4. 20, Oxford Magdalene College MS 188, Towerdocument in Record-Office Gr. I. 415から全ての異本を並記し、H C O T の記号を付した。翻訳は編者の刊本に従い記号を使っている。なお筆者の注釈には * 印をつけて原文と区別しておいた。

(H1) 第一音節ないし中間音節に、口を緊張させて発音する e を含むガリア語は、書く場合その e の前に i の文字を必要とする。例へば: bien (良い), rien (物), chien (犬) と。

(T1) ガリア語と言われ、その第一音節あるいは中間音節に口を緊張させて発音する e を

Orthographia Gallica

含むものは、例えば、 *bien*, *dieu* (神), *mieuz* (より良い), *trechier* (欺く), *mier* (海) および同類の語におけるように *e* の前で文字 *i* を発音しなくてはならない。

(CO1) H1 に同じ。例題追加分: *piere* (父), *miere* (母)

(H2) しかし、もし一方この *e* という母音が鋭く発音されるならば先行する *i* という母音なしにそれ自体で存在しなければならない。例えば: *beevez* (*beivre*), *menez* (*mener*), *tenez* (*tenir*), *pernez* (*prendre*)

(CO2) H2 に同じ。例題追加: *lessez* (*lesser*)

(H3) しかしこのあとの規則は曖昧である。従って *e* の前に *i* をやはり同時に書くようにと理解すること。上述の *e* は *a b c* 全ての文字のあとで、先に述べたとうりに発音されるべきなのである。*b* のあとでは *biez* [*bien?*] のように、*c* のあとでは *ciez* [*chien?*] のように、そしてその他同様に。だからこの規則はラテン語で言うとなれば [*e* を第一音節に持っている] 綴りについて理解されてきたし、また理解されるだろうと考えておくこと。

(H4) *e* の前の音節の中においては、*venez* (*venir*) のように *i* を書かないのだと知っておくように。

(H4a) *e* の前の *i* について述べる場合、その当該の *e* の文字が長いかぎり、単語の一つの音節が *i* で終り、別の音節が *e* で始まる *biez*, *ciez* という言葉についても理解されるだろう。

[このように完全な規則をもって全ての場合に真実である]

(CO3) たとえ、ある音節のはじめにあって *e* が鋭く発音されてもその前の音節の最後に *i* を置くのがよい: *biez* (*beivre?*), *priez* (*prier*), *liez* (*lier*), *affiez* (*afier*) のように。

* (H1) (T1) (H3) ANにおける二重母音 *ie* は著しい水平化を示した。英語の音体系では子音後に *j* の現われることが稀であったから島嶼語 AN の *je* > *e*, *jē* > *ē* という変化は大いに促進されたと言ってよいだろう。これは12世紀後半以後 AN の際立った特徴となったのである cf. Pope: [35.1.0.0]

ラテン語の *e* [ɛ] から生じた *je* の AN における縮減形 [e] を、音においても、綴りにおいても *ie* (*je*) に代えなければならないと *Orthographia Gallica* は教えているのである。cf. Pope: [39.1.2.]

(H2) '鋭く発音される母音 *e*' という表現は *e* にアクセントを置くという意味であろうか。狭い *e* と考えられる。

(H4a) 'その *e* の文字が長いかぎり' という指示は不正確である。この場合ラテン語では *e* は短かく開いていなければならないのであるから。

(H5) さらに完全に発音された e に終る語はもし女性であれば語末に ee と二重字を書かねばならない。例へば：

Femme amee, douee et enseigne[e] (天賦の才あり教養ある, 愛されし婦人) と。

(CO4) 完全な発音の e で女性形容詞が終る時は e を重複させて tres honuree dame (令夫人) のように書く。

(T3) さらに完全に発音された e に終る語は重ねた ee を書かねばならない, 即ち: donee (与えられた), amee (愛された) のように。

(H6) しかし半分だけ完全に発音される場合は e を重複させない, 即ち次のように:

Meinte feme est bone (多くの婦人は善良だ)

(CO6) 男性形容詞が un homme (一人の男), meynt homme (多くの男) のように e で終らないものであろうと女性の形容詞は e を付して終り, 半分完全に発音する:

meynte femme (多くの婦人), une femme (一人の婦人) のように。

(T4) 半分完全に発音される e に終る語は e を重複させない, 即ち: meynte feme est bone と。

(H7) しかしこの規則もいささか若い人達にとっては不明瞭である。従ってこれはもっと明瞭に説明されねばならない。なぜなら時には語末で二重に ee を持たぬ語を書く。時には一つの e だけを持って書き, 時には二重の ee をもって書く場合がある。

男性における形容詞, 即ち Franc home (立派な男), rud home (粗野な男), sotil home (馬鹿な男) のような場合は語末に e を付さない。

女性における形容詞は France dame (立派な婦人), sotile dame (愚かな婦人) のように語末に e を付す。

男性が一つの e をもっている時, 女性は二つの e 即ち形容詞は二重の ee を付す:

Tres honure sire (まことに尊敬さるべき殿方)

tres honuree dame (まことに尊敬さるべき婦人)

(CO5) 男性形容詞は完全に発音される e をもって終ろうとも e を重複させない:

tres honure sire のように。

(CO5a) しかし名詞では un Countee [a shire], un counte [a counte] があり, 小文字や大文字でさまざまな形がある。

un counte counte[e] [a counte(s) countid] (ある伯爵の領地)

de le Counte de tiel Counte (その州の伯爵の)

* (CO4) (T3) (CO6) (H7) 形容詞の女性形語尾に e を付すよう注意をうながしている。過去分詞形の女性単数語尾は殊に混乱を招いていた様子である。

(CO5a) un Countee は英語の綴りでは county となった。伯領という意味の場合に

語尾の ee を付しているようである。

M.T. Coyforelly の *'Tractatus Orthographie Gallicane* は過去分詞の語尾について次のように記述する：「e で終る全ての分詞は男性も女性もそれらの語から派生する語の音と区別するために語末において ee と二つの e をもって書かねばならない。例えば過去分詞 amee は二つの e をもって上述の語 aimez と区別するために書く。」
cf. E. Stengel ed., *'Tractatus Orthographie Gallicane per M.T. Coyforelly'*, *Zeitschrift für neufranzösische Sprache und Literatur*, 1879, I. p. 22.

(H89) 一つの音節が、二つの母音の性質をとる時、その二つの母音は、発音において一つの母音のように考えられる。例えば jeo (pron. pers. 1^{re} pers. sg.), ceo (pron. demonstr. m. sg. CR) のように。[cea, ceaux (それら), deaux (数詞) は e のかわりに ea を書く] を書く場合はその語の中でより大きな音を持つ母音を先に書く。

(CO7) 発音において一つの母音のようにみなされる poet (pooir) は、大きい音を持つ母音を先に書く。

(H90) しかし次のような綴り、あるいは単語 jeo, ceo は o なしで e をもって je, ce と書き得る。

(CO8) je, ce, jeo, ceo という綴りは ceo 又は o なしの ce と差別なく書くことができる。

(CO49) deaux, ceaux, eaux (彼等), veaux (望み) などは a をもって、あるいは a なしに、どちらでも書き得る。

* (H89) (H90) (CO8) (CO49) AN 綴りの実態を示している。jeo, ceo は二重母音の発音ではないが、綴りは AN 綴りの特徴を現わす。e のかわりに ea を書くのも AN 綴りである。

cea は ce, ceaux は ceux (pl.), deaux は deux, eaux (pl.) は eus と書かなければならない。veaux は veuex であろう。

(T6) 名詞と動詞の複数で最後の綴りに e を持つ場合は z の字を必要とする、即ち：amez (amer), enseignez (enseignier) のように。

(T9) 単数にあって t に終る語は、複数では z の文字を必要とする。すなわち単数で dyt (dire), fet (faire) となる語は複数では z を付して dytez, fetez となる。

(CO9) 単数の動詞で語末に t という字を持つものは、複数で z という字を必要とする、例えば：

単数で amet [he loveth] liset は、複数では amez [ye love], lisez [ye rede] となる。

(CO10) s 音に終る全ての動詞、形容詞、分詞は z をもって書かねばならない。

(CO10a) 文脈不明

(H36) 直接法の全ての時制の複数における一人称、および完了の単数における二人称は s に終る。

(H37) 他の全ての時制の二人称は t で終り、複数の二人称と全ての分詞の語尾は z で終る。

* (T6) 動詞の複数とは二人称の場合であろう。名詞の場合 z を語末に必要とするのは語尾に e を持つ場合とは限らない。過去分詞形複数を示す s を z と理解しているらしい。

(T9) 複数語尾 s のかわりに z を使うのは混乱である。名詞の場合も過去分詞の場合も複数語尾は s をとる。但し dire と faire は歴史的な音変化を現わしていない形が採用されているから例としては不適當であろう。複数形は dyz, fez となれば正しい。

(CO10) s と z の混同を示している論述。

(H37) 一般に二人称単数語尾は s である。t に終るという記述は間違っている。現在分詞であれば語尾は t である。分詞の語尾が z になるのは ts を表示する場合である。

(CO11) 全ての形容詞は s または z をもってくべつなく書き得る：ces, cez [these] あるいは les, lez [they] と。そしてもし u が s 音に先行するのでなければこれは正しい：toutz [all] などのように。

(CO12) s 音で終る全ての名詞は s をもって書かなければならない：seignours [lords] dames [ladyes] しかし下にあげる動詞についてはそれは起らない。即ち第一人称…

(H38) 単数で t に終るそのような形容詞、名詞は複数では書き手の任意に従って s または z に終る：tenements (小作地) または tenemenz, ses (pron. pers. pl. poss.de l'unité 3e pers. CR) または sez のように。

(CO13) 単数で t に終るたとえば tenement, gent (人), lent (緩慢) などの場合、複数では区別なく s または tz と書くことができる。

(H93) te あるいは二重の ee で終る名詞のあとには feez (信仰), amistez (友情), bountez (寛大さ), leez (側) のように z を加えること。そして d で終る言葉のあとには redz (薪), bledz (麦) のように z を書く。

(H94) l のあとも genulz (膝) のように書く。

(CO95) 文脈不明

(CO14) 単数の語の l のあとに s を付すときは s のかわりに z が書かれる：filz (子息) のように。

(H73) eisnez (第一子), puissnez (第二子) のような語、およびその他のいくつか尊敬を

Orthographia Gallica

あらわす名前は z をもって書き、そしてそれは発音しない。

(CO15) l または u が a あるいは e のあとに置かれ、直後に s が続けられるときは *deux, loialx* と、このように s は x にかえられるべきである。

* (CO11) z をもって書くのは誤りである。u が s 音に先行するのでなければ、という記述も誤りである。tout は tous (pl.) となり toute (f.) は toutes となる。toutz の綴りは AN 風綴りと言える。

(CO12) 指摘している動詞の例題が欠除している。

(H38) ts は z である。従って ses を sez と書く、と指示するのは誤り。

(CO13) t で終る名詞の複数語尾を s あるいは tz と区別なく書き得るという指示は誤りである。語尾は ts あるいは z となる。(CO11) の記述と同じく語尾に tz と書くのは AN 綴りである。

(H93) 語尾の te, ee のあとには複数の場合 s を付す。z は誤り。また、d のあとも s を付す。複数の表示に s と z が混同されている論述である。

(H94) l のあとも z ではなくて s を付す。

(CO14) そして ls=z で表記する。故に fil の複数は fils または fiz と書かれるべきところ、filz と書くのは AN 綴りと言える。

(H73) z は s と書くべきである。語尾の s を発音しなくなった傾向を示しているのは正しいが、尊厳をあらわす敬称という説明には例文が付されていないので不明瞭である。

(C15) 伝統的な考え方によると不正確な記述である。us は x にあたる。loialx のように x を付す場合 l は不用の筈であるが、この点については大陸でも不明確であった模様で loyal は複数で loiaux となった。

(H75) また、ego (pron. pers. sg. 1人称主格) mei (属格) という代名詞 [あるいは二人称の] については nous, no^o; (pron. pers. 1^{re} pers. pl. CS CR) vous, vo^o; (pron. pers. 2^e pers. pl. CS CR). のように v と ous [または o^o] と、z なしに書く。

(H76) しかし nostre, vestre, noz, voz は noz, voz letres (我々の、貴方達の手紙) のように書く。

(CO16) ego mei または二人称から生じる代名詞 nous, vous は us をもって、あるいはその場所に nous [we], no^o [us], vous [ye] vo^o と書かねばならない。

(CO17) noster, nostra, nostrum (pron. poss. 1^{re} pers. pl. m. f. n.) または vester, vestra, vestrum (pron. poss. 2^e pers. pl. m. f. n.) から生じる nos, vos は z あるいは s をもって区別なく o のあとで u なしに書くことができる。

(H91, CO18) ある音節が呼気をもってかのように発音される時、その音節は s と t をもって呼気のかわりにかく、例えば：est (estre), cest (pron. demonstr. m. sg. CR), plest (plaire) のように。

(T7, H29) 呼気をもってかのように発音されるいくつかの音節は s と t をもって est, plest, cest とこのように書き得る。

(H35) s が t に付されると h の音を持つ。est, plest は eght, pleght と発音されるようになる。

* (CO17) 人称代名詞 1 人称, 2 人称 複数 主格 対格 は nos, vos である。

所有形容詞 (possessifs de la pluralité) 1 人称, 2 人称 男性複数対格, 女性 複数主格, 対格が noz, voz である。記述にある z と s の互換は誤り。またラテン語は単数が示されているから正確な対応は nostre, vostre となる。

(H91, CO18) (T7, H29) (H35) 子音 t の前では s が有気音となり消してゆく過程を示している。

(H30) 現在と過去の動詞においては batist (bastir) のように s を書く。

(H31) しかしいつ s を書き、いつ s を書かぬかを理解すること。まず t と e, i, o, u の間には、現在および過去の動詞においては batist のように書く。e は est のように、i は fist のように、o は tost のように、u は lust のように、である。

(CO73) 現在時制と過去時制の動詞においては i, e, o, u のあとで st と書きなさい。例えば：batist, fist (faire), est, tost (toster), lust (luir) のように。

(CO96) 現在時制と過去時制においては i, e, o, u, と t の間に s が書かれなければならない：est, fist, tost, lust など。

過去形では a と t の間に s を書く：amast (amer) のように。

(CO67) ascun (誰か) が aucun と発音されるように、時には s が書かれ u と発音される。

(H32, 61) ascun や blasmer (非難する) のように時に s を u のかわりに書くこと。そしてそれは aucun と発音される。

(cf. H8) s は [音においては変化させられるが文字においては変化がない] ascun のように書き, acun と読む。

(H33) また一方 n のかわりに s を書く：enpernez (enprendre) のかわりに espernez となるように。

(H34) また同じく美しい書き方として s を書くように：meme (同じ) のかわりに mesme, trechier (欺く) のかわりに treschier と。

(CO19) もし e のあとに d が書かれて m がすぐあとに続くと d は s に変えられる。

(CO21) s の文字が母音のあとに書かれ、次にすぐ m が続けられると s は発音されない、例えば：mandasmes (mander), fismes (faire), duresme (durer) のように。

(CO93) いろいろな音節において m が e あるいは i に続くとき、そしてまた一つの語におけると、s を介入させなければならない：

duresme, fismes, feismes のように。

(CO94) a が語の中間音節にあり m が直後に続くときはいつでも s を mandasmes のように介入させるが s は発音しない。

* (H30) (H31) (CO73) (CO96) 例には 3 人称 単数があげられている。過去の動詞に s を付すことは多いが、3 人称の現在形には大部分あてはまらない。例題で現在時制を示すものは est のみであるがこの動詞の活用は例外と言える。

(CO96) 過去形 即ち、直接法単純過去の説明の例に amast と、この場合は接続法半過去の形が示されている。単純過去形には passé faible と fort の違いもあり、活用は困難であった。

(H32, 61) blasmer の s は語源に由来する。しかし ascun の s は語源に由来しない、AN 綴りである。

(H33) 接頭字 in に由来する en と x に由来する es との交換を論じている。enpernez は AN に頻繁にあらわれる形で enprenez の métathèse。

(H34) s を介入させるのが美しい書き方を表現しているところは興味深い。

(CO93) 語源的にみて s が入る場合と s を介入させない場合がある。起動をあらわす挿入字 esc に由来する s であって、論述は s を類推も含めて多く用いる傾向を示している。

(H95, CO97) 未来時制一人称は ay で終り、三人称は a で終る。

(H39) 母音で始まるある語が母音で終る他の音節の後に続く時、先行する音節の母音は省略され、母音に連繫していた子音は次の語の母音と連続させなければならない、即ち：malme (私の魂), Dengleterre (英国の), Dirlande (アイルランドの) となり、それらは休止なしに発音されるべきである。

(CO22) de Engleterre, de Irlande は Dengleterre [of Englund], Dirlande [of Irlande] と書く。

(H22) 母音で始まる語が母音で終る音節の後につくとき、[前の] 音節の母音は省略すること。

(H40) この規則はその語の意味が奪われたり取り除かれたりしない限り正しい。例えば：de eaux (彼等の) のかわりに deux, または si ay (そして私は持つ) のかわりに say と

なるような場合である。

(H40^a) そして良い話し手は、話し言葉で *solempne bone est* (厳肅なのは良い) のように一つの母音を他の母音に続けさせるようなことはしない。また一方、話し手にとってはそれらの語の性質を忠実にあらわすようにしなければならない。

(CO28) 省略によって語の音が、あるいは文字の変更によって語の意味が疑わしくなったり、変化させられたり、あるいは文字の付加によって (そのようになる) 場合は常に書かれているように発音されるべきである：

de eaux のかわりに *deux* と書く時や、*sy ay* のかわりに *say* と書く時など。

* (H40, CO28) 母音省略によって意味が不明瞭になる場合の悪い例が挙げられているのか、*eaux* は AN 綴りであって *eux* が正しい。*deux* (数詞の 2) と *d'eux* の混雑をさけようとしたのか、*say* は *savoir* の直接法現在 1 人称単数活用 *sai* とまぎらわしくなる。

(H47) さらに、*a*, *e*, *o* のあとに *l* を持つ第一音節あるいは中間音節でその *l* のあとにすぐ他の子音が続くと、その *l* は *u* のように発音しなければならない：*malme*, *malveis* (悪い) のように。

(CO23) *a*, *e*, *o* のあとに *l* の字が置かれ、もし他の子音が *l* のあとに続く時は *l* は *u* のように発音されねばならない。即ち：

malme [*my soule*], *loialment* (忠実に), *bel compaignoun* (美しい友) のように。

(H48) しかし一方この規則は、*del bien* (良きものの) のような場合は適用しない。

(H49) 一つの母音が語の中で音節の終りにくる *l* に続くとき、*l* は個有の音を持ち、次の母音とつながれる：

beal[*e*]*ment* (美しく) のように。

(CO24) 母音が *l* に続けられるとき、*l* の字はそれに続く母音と連結して自己の個有の性質を保つこととなる。

(H50) そして又、時には次のように書く：

del, *de*, *du*, *des*, *al*, *au*, *a*, *as* と。

(CO78) 時には *de*, *du*, *del*, *a*, *au*, *al*, *as* そしてまた *de*, *a*, などと書く。

(H51) 従って一方あるいは他方を書く時、十分に注意するように。*de* が *le* の前にくる時、*le* の *e* は取除かれ、*l* が *de* に結びつけられる、例えば：

de l[*e*] *Evesque* は *del Evesque* (司教の) となり、[*de le seignour*] は *del seignour* (領主の) となる。

(CO30) アングリア人の英語において *the* の印がある場合、常にガリア人にとっては *le*

又は la が用いられる。もし de あるいは a がその文字に先立つと le の e は取除かれなければならない。そして l が a または de と結合しなければならない、即ち：

a le tresdoute seignour (いと畏き主君に) は al tresdoute seignour と、de le tresnoble seignour (いと気高き君の) は del tresnoble seignour となる。

(CO31) 他の母音が le の形の直後に続くとき、e を取除き l は次の母音に続ける、即ち：
a le honourable seignour (尊敬すべき主君に)、または a le Evesque (司教貌下に) は a lonourable seignour, a levesque 等々と書かなければならない。

(H52, 60) しかし la と書くとき、そして de が la の前にくるとき、その a は取除かれず、de la dame (奥方の)、de la vale (谷間の) 等々となる。

(CO32) 女性形における la という印が書かれる時は、たとえ直後に子音が続き、de または a が先行しても la は分割なく自己の形を保つ、即ち：

de la dame, a la tresreverent dame (いと尊き奥方に) のように。

(CO32a) 女性形の la という文字が書かれ、母音が直後に続く場合 l は後続する母音と連結することもできるし、また自己の個有の性質を保つこともできる。

a la abbessse (尼僧修道院長に)、de la esglise (教会の)、または a labesse, de lesglise と書き得る。

(H53) 男性と女性と町をあらわす個有名詞の前には de を書く。

(CO78a, s.o.CO78) de, a について。この the という印が後続せぬときは：

a mon seignur le counte d'Oxonforde (我が主君オクスフォード伯に)

de mon seignur Thomas d'Irlonde (我が主君アイルランドのトマス殿) と書く。

[Johan de Waynflote] のように名前がすぐ続くとき seignour または sire を短かく省略して書くこと。seignour のかわりに je のように e を上に、また、sire からくる e を上に je と書く、あるいは e なしに mon l とこのように書くこともできる。

(CO79) del, al [または al のかわりの au] について。

the が続けられ、子音はその印に続くと、上述のように del の l は u に変ってはならない。

(CO79a) しかし al の l はよく保たれる。du はこのように de le または del の意味を持つ、即ち：

de le dit portour (上述の荷持係りの) のかわりに du dit portour となる。

(H55) 時には形容詞の前で de を書き、時には du が書かれる：de は de ceste chose (この物の) のように、du は du dit portour などのように。

<H56) また en については問題は別だ：en は en de ceste assavoir (この知識について) のように書く。

(CO33) この le の文字が書かれ、子音が直後に続き en が先行するときは n は取除かれねばならず、l は e と結合されなければならない、即ち：

en le countee (伯領において) は el countee と書きかえる。

(H54) 単数で de または del と書くとき、複数では des と書くこと。

(CO34) 単数に置かれた el, al, del, は複数では、いつも es, as, des と書かなければならない。

(CO80) 単数の全ての語に対して複数では es, as と書かなければならない。

(H57) le が a のあとにくる時、al と書かれ、複数では as となる。

(H58) しかし la は a la dame のように変化しない。

(H59) また、時には od のかわりに de と書くように：

od le bouche にかわって de bouche (口で) のように。

(CO81) 時には od のかわりに de を書く：od le bouche のかわりに vous dirray de bouche (私は貴方に口で申しませう) と。

(O82) cum のかわりに od または ou と書きなさい。

(CO83) vel あるいは ubi のかわりに ou と書く。

* (H48) de+le=du となるのであるが、del をそのままに発音し、u と発音しない例として興味深い。それは AN の傾向であったかもしれない。

(H50) より (CO83) までは語形と語彙の問題である。例題には AN 綴りが多く見られる。

(CO79) この規則は (H48) に対応する。所有をあらわす del (of the) は例外と考えられていたのか。

(H56) 例題の en de ceste assavoir には不用の de が加えられてある。

(H57) al の複数形は as のほかに aus aux がある。

(H58) は (H52) と対応。

(H64) また時に si のかわりに y の文字を書く：

y vous plest (そこは貴方の気に入る) のように。そして場所、其処に、をあらわすために jeo y serray (私はその場所にいませう) と書く。

(CO49a) この y という文字は時には si のかわりに用い、si vous plest というかわりに y vous plest という。時には其処に、のかわりに用いられ、jeo y serray と、このようになる。

(CO49b) 時には強調的、指示的表現のためには j' ay mys mon seal a ycestes (私はそこに印璽を置きました) と、このように言う。

(H74) 時には memes のかわりに y を書く：

mesme cesty dismaigne (この同じ日曜日) のかわりに y dismenge となる。

(H65) entreにかわって pentre を用いる。

* (H64) (CO49a) si のかわりに y を用いるという指示は間違いである。y vous plest はこの場合 s'il vous plaît を意味していると思える。

(H74) memes のかわりに y を書くことも不可解である。特殊な AN 的表現であったのかも知れない。

(CO49b) また ycestes の y は AN 綴りと見做される。アングロノルマン綴りでは y を好む傾向があった。

(H65) entre (間に, で, の)にかわる pentre (に対して) は語の取り違いである。

(H62) 様々な意味に対して s と c の間にある相異に充分注意することが必要であると知りなさい。

celo に対しては ciel (空) と, sal は seel (塩)

sigillo は seal (印璽) cervo は cerf (鹿)

servo は servant (召使) serf と書く。

(CO50) 様々な書き方は語の差異を作る。

時にはある語は発音が類似している。

ciel (空), seel (手桶), seal (印);

celee (かくれたもの), ceele (それ);

coy (静か), quoy (なに);

meal (卵黄), moel (白石);

cerf (鹿), serf (農奴);

teindre (色を変える), tendre (柔らかな), tenir (持つ);

attendre (待つ), atte[i]ndre (到達する);

esteant (存在する), esteyant (立っている);

aymer (愛する), amer (苦い);

foail (燃料), fel (胆嚢), feal (忠実な);

veel (犢), viel (年老いた);

veile (葡萄の巻きひげ), veille (目を醒ましていること);

vile (地方の家), ville (村);

brahel (半ズボン), brael (ベルト);

herde (群 [動物]), erde (結びつく), enherde (付着する);

essil (破壊), huissel (腋窩), assel (車軸);

nief (土着の), neif (雪), noef (九 [数詞]);

Orthographia Gallica

baaile (あくび), baile (引渡し), bale (袋), balee (梱);
litter (敷きわら), littere (担いかご);
fournier (用意する), forrier (略奪者), forer (糧秣);
rastel (熊手), rastuer (削り器具);
mesure (尺度), meseire (苦しみ);
piel (白黒のぶちの子馬), peel (皮);
berzis (草, ハーブ), berzize (発酵前の麦芽浸出液);
grisil (靱), greele (細い), grele (上衣);
towne (容量単位), tonne (調子);
neym (倭人), neyn (哀れな者); など。

(H66) 次の語 huissel, assel, essel (心棒) は音が非常に似ている。

(H8) 次の文字は音が変わるが、書き方は変わらないことを理解するように: c, d, e, f, g, l, n, p, s と t.

Cは母音で始まる語の前では次のように書き、そして読みなさい: vifs cliercs est il (彼は元気な書記だ) と。

Dは ruds homme est il (彼は荒々しい男だ) のように、

Eは larges home est il (彼は大男だ) のように、

Fは vifs home est il (彼は元気な男だ) のように書き、vif と読む。

Gは rougs home est il (彼は赤ら顔の男だ) のように、そして roug[e] と読む。

Lは nul home (誰か) のように、そして nuls と読む。男性では nul と書き、女性では nule と書く。

cil と celle, il と elle この場合、読むときに一つの l は発音しない。

Nは bon home (好人物) や bon gre (善意) のように書き、その時 n は母音の前では個有の音で発音し、bons homme と読む。

Pは oept (作品) のように、

Sは ascun のように、そして acun と読む。

Tは子音の前に書くと d と読むように、母音の前ではその通りに発音される。

Fについては、男性も女性も v にかわる。男性においてはその儘に読むこと。

Gについて、母音の前では rougs home と読むように。

(CO51) これらの文字 c, d, e, f, g, l, n, p, s と t は発音においては変わるが、書き方は変わらないと知っておくように。

Cは clerici 即ち cliers におけるように、母音の前に来た時はガリア語では clers と発音される。

荒々しい男 ruds hommes は ruz hommes と発音せねばならず、善良な婦人、即ち bones

femmes は bons femmes と発音し、その際 n は半分不明瞭に発音すべきである。元気な男 vifs hommes は vys hommes と発音されねばならない、その他同様。

(CO77) l と r は書き方において時には二重字になる。しかし発音においてはそうではない、例えば：

celle (pron. dem. f. sg.), elle (pron. pers. f. sg.) terre [londe], guerre [werre] は tere, gere, ele, cele 等と発音しなければならない。

* (H8) 例題には名詞、形容詞の主格 CS と斜格 CR の混乱が見られる。主格に付す s が書き方においてもまた発音においても意識されているようであるが vifs, rougs と書いて vif, roug[e] と読むと教え、また nul と書いて nuls と読む、と教えたりする。bon home と書き、そして bons homme と発音するようにと教える場合など、音を示す時の例題の綴りが不正確である。CS を正しく書けば bons hom でありその複数 は bon home となる筈だ。CR の複数であれば bons hom(m)es となる。例題の home, homme はすべて CS の場合に CR の形を使用している。当時における、殊に AN における、CS と CR の混同の実態が示されている例であろう。

屈折の s の前に屈折しない語幹の語末子音を導入する傾向も AN である。Pope : [57・1]。混乱は更に屈折の s を -e に終る男性名詞の単数主格にも付す場合があった。peres という綴りなどに見られる。Pope : [57・2]

C は cliercs の綴りで K 音を発音しないようにとの注意であろう。AN では cleric, clerk の綴りがある。F については男性も女性も f が v になるという指摘は正しくない。男性の f は女性では f のあとに母音 e が続くので v に変り得る。

(H98) フランス語はラテン語のように短かく書かれない、なぜならフランス語は完全な言葉を要求するからである。

(CO84) ラテン語は短かく書き得るが、ガリア語は完全な語を要求する。

(H63) 多くのところでフランス語はラテン語と一致する、例えば：septem は sept (七 [数詞])、prebenda は prebendre (食料) である。それは provendre のように発音される。

(CO85) 大部分ラテン語で書かれたものに従ってガリア語を書くように、例えば：

compotum は compte (計算), septem は sept, prebenda は prebendre, opus は oeps 等々。

(CO86) 次の語については相異がある：

apprendre (習う) と prendre (取る) reprendre (再起する) ; oez (聞く) と oeps (仕事) ; vys (意見) と huys (入口) ; kynil (犬の群) と kenil (管)

(H9) 従って次のように言うよう心得ること：

Orthographia Gallica

rougs homme (赤い服の男), chival rous (赤毛の馬), harang sor (褐色燻製鯨), escuede goules (輝くあかい楯), vin vermail (赤葡萄酒), rose vermaile (深紅のバラ), drap rouge (赤い布)

しかし私はこれを綴りについて言うのではなく、多くの言い方を持っている英語のこの red という言葉の多様性について言うのだ。

(O87) イングランドの reed という語に対してガリア語はいろいろの言葉がある、即ち： rous chivaler (緋色の騎士), chival rous, harang soor, escuede goules, vin [vermail], rose vermaile, と。

(CO88) breke というこの動詞に対しては：

fruchez chaud payn (熱いパンを千切る), debrisez l'os (骨を折る), rumpez la corde (綱を切る) enfraignez covenaut (約束を破る), debrisez la hanap (杯を割る) などがある。

(CO89) blowe に対しては：

ventulez od le vent (風をおこす), corneiez od le corne (角笛を吹く), suflez de bouche (口笛を鳴らす) がある。

(CO90) daym (雄鹿) と dayn (地方執事) は異なる。

- * (H98) (CO84) ラテン語はフランス語より長い綴りが多い。従って論述は不正確。
- (CO86) (H9) (O87) (CO88, 89, 90) 語彙論である。殊に英語に対応してフランス語を教えようとする意図が窺える。

(H78) 子音に始まる語が、文中、意味上連関する子音に終る語に続けられるときは、前の語の子音はたとえ書かれてあっても、音を出してはいけないし(前に置かれた語末子音は)発音してもいけない。

(CO27) 子音に始まる語が意味上連関する子音に終る語のあとに続けられる時はいつでも、前の語の子音は書かれているけれども発音においては発音されてはならない。

例えば： apres manger (食べたあと) は apre manger と発音される。

(CO28a) あるいは複数のかわりに単数を発音する。

例えば： tenementz (所有), gentz (人々) のかわりに tenement, gent と。 sachantz (知ること) のかわりに sachant と。

(H78a) m, n と r は発音において例外であり、発音は省略されてはならない。即ち： pur Dieu, William, faitz mon talent (神かけてウィリアムよ、私の意図するところを行え) [下線筆者]

(CO29) l, m, n, r, t, c, k は子音が次にきてもそれ自体十分に発音されるか、または文

字の変化によって十分に発音される。

(H79) いくつかの語の末尾，または語の真中にあるときは十分に発音されるのがよい。

ちょうど：

cez sont mes compagnons (彼等は私の仲間です) のように。

(CO20) William が使われるかわりに，もし文字が諸部分から離れて外へでるときは G [u]illiam と書く必要がある。

* (CO28a) 語尾の子音を発音しなくなるという傾向を示すものであろうか。語尾の綴りはしかし複数 tz ではなく，ts 又は z である。tz は AN 綴りといえる。

(H78a) 例文の動詞 faitz も faites または fais である。

(CO29) per mutacionem littere ‘文字を変えて’ という表現は不明瞭。

(H79) この項の意味するところも不明瞭である。cez sont の t について説明しているのであろうか。cez の z は s となるべきところである。

(T13) grant, quant は語頭としては三文字から成るものとして g^ant, q^ant のように短縮して書き得る。

(T13a) 女性形は grande (大きい) とか quante foiz (幾度か) のように書く。

(H11) quant, grant, demandant, sachant, tant および全ての分詞は u なしに n をもって書かれる。しかし，読む時には u の音を持つ。

(H12) 女性と結びつくそのような分詞は単数では e に終り，男性では e なしに終る。

(H13) grant が女性と結ばれるとき，t は d に変る，例えば：grand pite のように。

(CO36) このような音節または語，quant, grant, demandant, sachant とまた同様の語は u なしに単なる n をもって書かねばならない。しかし発音においては u が発音されなければならない。

(O52, C53) この grant という語が，‘大なる’ という意味を示し，女性としてつけ加えられる時は e が続くように，そして t が d に変るようになる：

grande dame (領主婦人)，grande charge (大責任)

(O53, C52) grant seignour (大領主) のようにこの grant が男性につけ加えられる時，そしてまた許可を意味する時は，たとえ e がそれに続いてても t は d に変らない。例えば：j' ay grante (私は許可を持つ) のように。

(H14) g と q のあとでは u は発音されない：

quatre (四[数詞])，guerre (戦い) のような場合，qatre, gere と読む。

(CO54) g または q のあとに u が書かれてあっても quatre, guerre のようには発音されず qatre, gere のように発音される。

- * (H11) (CO36) 鼻母音 *ã* が鼻子音と同じ音節にあって発音される場合、綴り *aun* が用いられたのは13世紀初頭からの AN 綴りの顕著な特徴であった。Pope : [34.1.] この項で教えている綴りは *aun* の綴りを否定し、*an* と書くべき綴りなのであるが、読む時、すなわち発音する時には *u* 音を挿入するというのは、綴りは否定しても AN 語の極めて特徴的な音を保持するようにと指示していることに他ならない。
- (H24) (CO54) *quatre, guerre* のような場合 *u* を発音しないと指示しているところも興味深い。AN の実態は *u* 音を発音していた可能性が強いからである。

(H41) この *moy, toy, soy, Roy* という語は、ガリア語の多様性に従って *o* または *e* をもって書き得る。また、*i* または *y* をもって書き得る。

(CO26) *moy, toy, soy* は *e* 又は *o* をもって書いてもよい。*i* 又は *y* によって区別なく書いてもよい。

(H42) また時には *moy* を、時には *me* を書く : *si rien soit devers moy* (もし何か私に対してあれば) や、*me recommandetz a un tel* (私をある人に紹介して下さい) のように。

従って、いつでもある与格が *moi, toi, soi* の対格に続くとき、それらは *me, te, se* と変えられる。

(H43) *ego mei* の主格と対格は、単数の2人称と3人称において *me, te, se* と書かれる。もし誰かがこの形をくずさなければ・・・

前置詞と共にあっては *devers moy* (私に対して)、*devant [toy?]* (君の前に) のようになる。

(H43a) そしてその他の全ての斜格は *moy, toy, soy* のように *y* で終る。

(CO58) 単数の対格においては *me* が、その他の格においては *moy* が書かれる。

(CO59) 対格がある記号と共に置かれる時は *moy* を書かねばならない。例えば :

si rien[thinge] soit devers moy のように。

(CO62) それらの全ての斜格は *luy, moy, toy* のように書かれるべきだ。ただし上述の対格を除く。

(CO60) 複数では全ての格において *mes, tes, les* 等々と書くこと。

(H44) 時には *moy* または *luy* と言い、時には *jeo* または *cil* と言いなさい。例えば : *cil et moy* (その人と私) とか *jeo et luy* (私と彼) のように。

(H44a) だから、次のようにこの規則を守ると知っておくこと : 主格には *jeo* と *cil* を、斜格には *moy* と *luy* を用いる。そして貴方の前の誰かを指し示す時は *cil et moy* となる。この *moy* は斜格のようになる。

もし *jeo et luy* と言う場合、その *luy* は斜格である。

(CO61) 主格の代名詞 *je* と *cil* が同時に用いられる時、後に続くものは斜格として用いられる、例えば：*je et luy* とか *cil et moy* のように。

* (H41) (CO26) 大陸フランス語においては12世紀前半に *mei* における如き二重母音の *ei* は *oi* に変化した。[Pope § 226] AN においては13世紀にかけて *ei* が水平化して *e* となるかあるいは *ei* > *oi* という変化を生ぜず *ei* のまま残ったのである。*moy*, *toy* などはフランス語の多様性に従って *o* または *e* をもって書いてもよいという指摘は依然として *ei* が多く用いられていた事実を示しているし、またそれは大陸フランス語の *ei* > *oi* 発展段階を意識している記述として興味深い。そしてまた、*i* あるいは *y* を区別なく書き得るという指摘も AN の一つの特徴である。Coyfurelly の *Tractatus Orthographie Gallicane* にも次の説明が見える。「*y* はどんな場所でも *i* の音を持ち、非常に多くの場合 *i* に書きかえるべきだ」(E. Stengel ed., *Tractatus Orthographie Gallicane* p. 20)

(H42) 人称代名詞の強形と弱形の用法を論じようとするのであるが、強形および弱形を使用する際の条件が理解されていない。一般に弱形 (*formes faibles*) は動詞の前で用い、強形 (*formes fortes*) は前置詞および動詞のあとに用いる。そして不定詞、分詞、動名詞の前にも用いる。

弱形は *me*, *te* (*direct*, *indirect*), *le*, *la* ((*m. f. direct*), *li* (*m. f. indirect*)) *se*, 強形は *moi*, *toi*, *lui* (*m.*) *li* (*f.*) *soi*; *eus.*, *eles*

(H43) 主格と対格についての明確な概念が消失していたのか、*Et sachez qe le nominatyf et l'acusatyf de ego mei, secunde et tercie persone el singuler serront escriptz me te se*, という論述は誤りである。

(CO58) (CO59) (CO62) においては強形と弱形を格の概念で処理しようとするので混乱が起っている。それは (H42) においても見られるところである。問題の取扱いは不正確、叙述には取り違えがある。

(H43a) *i* にかわる *y* は英国で好まれた綴りと思えるが斜格であるから *y* を書くというのは誤りである。そしてまた、強形は斜格だけに用いるのではない、*moy*, *toy*, *soy* は主格にも用いる。

(CO60) *mes*, *tes* は *possessifs* の複数、3人称は *ses* である。*les* は所有格ではなく人称代名詞3人称対格弱形の複数。尚、*mes* は男性主格単数形でもあり、主格複数形は *mi*, *ti*, *si*。AN にあっては、特に当時格の概念が非常に不明確で混乱していたと思えるが、*Orthographia Gallica* には格を強いて教えようとするところが見受けられる。

(H44a) (CO61) 再び *moy* と *luy* を斜格であると、誤りを教えている。強形と格と

を混同。

(H45, cf. 86) また時には *cestes*, 時には *ceaux* と書くこと。この場合 *cestes* は主格と対格としてであること, *ceaux* は他の全ての格において書かれることを知っておくように。

(CO76) 主格と対格においては *cestes*, *celles* と書きなさい。また, その他の格においては, 特に示されたものが存在するのでなければ *ceux* と書くこと。そして *cestes* を *j'ay mys mon seal a ycestes* (あの人達の所に私は印璽を置いた) と, このように書きなさい。

(H86) *is* (pron. demonstr. m. 主格), *eius* (属格) の複数主格と対格は *celles* と書かれる。属格, 与格, 奪格は *ceaux* となる。

(H45a) しかし, もし事物が現存するか, はっきりあるものとして示される場合, *ceaux* は *cestes* にかわる。例えば: *de cestes choses* (これらのものについて), あるいは *en cestes chosez me trovez prest* (私がこれらについて準備しているのが分かるでしょう) のように。

(H46) また時には *totes*, 時には *touz* と書くように。それは即ち: 主格と対格が *totes* で他の斜格が *touz* ということだ。

* (H45, cf. 86) *cestes* は指示代名詞 女性複数において主格, 対格に用いられる。しかし *ceaux* が他の全ての格において用いられるということはない。*ceaux=ceus* は男性複数 対格に用いられるのである。この項ではまた, 近称と遠称の問題と格の問題が混乱している。

(CO76) *cestes* は女性複数の近称 *celes* は遠称である。そして *cil* (*that*) の男性複数 対格が *ceux* となる。女性, 男性 複数の区別ができていないから誤りを教えていることになる。

(H86) *celles* は女性複数の主格, 対格に用いられる。この項の叙述のように *ceaux* が所有格, 与格, 奪格に用いられるのではなく, *ceaux* は男性複数 対格である。再び女性形 男性形の混乱が見受けられ, さらに女性形 男性形と格を混同している誤りが見える。

(H45a) この記述によると遠称, 近称の概念が存在していたことは認められる。

(H46) この項においても性の区別と格の区別が混乱している。*touz* (*toz*) は男性単数主格あるいは複数の対格であり *totes* は女性複数。故に *totes* が主格, 対格に用いられるのは女性形で, *touz* が斜格に用いられるのは男性複数である。

	Masc. sg.	pl.	Fem. sg.	pl.	Neutre sg.
CS	<i>tout, toz</i>	<i>tout tuit</i>	<i>toute</i>	<i>toutes (totes)</i>	
CR	<i>tout</i>	<i>tous, toz</i>	<i>toute</i>	<i>toutes (totes)</i>	<i>tout</i>

Orthographia Gallica

(H15) jeo, moy, nous, vous, luy, les 等々はつねに動詞の前に書かれる, 例えば:

vous vous aforcez (貴方は自分自身努力する)

nous vous mandons (我々は貴方に依頼する)

il vous prie (彼は貴方に願う)

cil vous manace (それは貴方を脅かす)

(CO55) jeo, moy, me, nous, vous, luy, les は一般に動詞の前で, 記号なしに次のように書かれる:

de touz les biens quelles vous m'envoiastes

(彼女達が貴方のために私に送った全ての財産)

(H15a) また, ego mei の二人称, 三人称の与格, 対格は 主格と同じく, たしかに動詞の前に置かれる。

(H67) jeo と対格は動詞の前に置く, 動詞の後には与格を置く。

(H67a) 与格が文を始めるような時は, その与格は与格の印を持つ, 例えば:

jeo me recomant a vous (自己紹介をします) などのように。

冒頭ではこう言う: A vous sire et a ma tres honuree dame vostre compaigne jeo me recomant (貴方様と御同伴の令婦人に私を推挙します)

(CO56) jeo, moy, nous, vous, luy, les などが動詞のあとに書かれると, 記号を前に置く必要がある, 例えば: jeo me recomant a vous のように。

(CO57) vous または luy など上述の, あるいはそれらのどれかが動詞の前に置かれる時, そして話している人の名前がすぐあとに置かれると vous の [前に印が置かれる], 例えば:

A vous seignour, sire Justice (裁判官閣下に), a les Justices (裁判官の皆様), a la tresexcellente dame (いと尊き御婦人に) など。

(H68) そして vous が動詞のあとの場合, 二人称については devers vous というようになる。

(CO75) 大部分の場合, 対格は記号と共に与格の場所に置かれる。尊敬をあらわすためには, 例えば:

vous manderay ma lettre (貴方に私の手紙をお送りしよう) は, je manderay ma lettre devers vous (貴方様に対して私の手紙を差し上げましょう) となる。

* (H15) 与格を動詞の前に書くという叙述である。例文の vous vous aforcez は代名動詞の直接目的語であるから例としては不適當。

(CO55) ante verba sine signo '動詞の前で記号なしに' というように, signo (印) という語が頻出する。この場合は前置詞なしに・・・という意味であろう。

(H67) 与格を動詞のあとに置くという叙述であるが、この場合、人称代名詞 強形を
与格と考えているらしい。強形、弱形と格を混同しているところが見える。強形は次
のように動詞のあとにくる場合がある：Et quant j ai avant perdu lui=puisque je
l' ai perdu auparavant (*La Chastelaine de Vergi* 815)

(CO75) 対格が記号と共に与格の場所におかれるという叙述は、前置詞を伴って与格
になるということであろう。尊敬をあらわすためには前置詞を伴った形を用いるとい
う記述も興味深い。

(H69) vostre または sue に対して la または le を次のように書くと知っておくこと。
例えば：jeo suy le vostre escoler (私は貴方の生徒です)、あるいは (jeo suy le) vostre
servant en qanqe jeo puisse faire (私ができる事は何事においても私は貴方のしもべで
す)、あるいは jeo suy la sue ancelle (私は彼女の娘です)、またこのように le vostre en
tut tel (全てにおいて貴方様の) などである。それは最も丁寧に話すためであって、特に
jeo suy le vostre (私は貴方様のもの) のように名詞が示されていない時などである。

(H16) あなたが誰かに依頼する時は jeo を置かずに vous pri[e] と言うことができる。

(CO63) 誰かから何かを要求するとき jeo なしに vous pri と言い得る。

(H17) 誰か他の者が懇願する時には cil または il vous prie (彼は貴方に願う) と書くこ
と。他の人たちは cil または il vous plest (彼は貴方の気に入る) と書くであろうがそれ
は誤りである。何故なら pry と plest は意味が異っているからだ。

(CO64) 誰かが他の人に依頼する時は cil vous prie (彼は貴方に頼む) と言いなさい。

(H18) jeo は次のように動詞の前に置く：jeo vous pry (お願いします)、jeo m' affy
(たしかです) と。

(H19) jeo を消して y の場所に i を書く、そしてそれに e をつけ加える：vous prie,
m' affie のように。これは y で終る動詞においてのことと知るべきであるが、子音で終
る動詞でその前に jeo を置くものは語尾に e をつけ加えない。即ち：jeo vous manc (私
は貴方にとって不足です) など、そして同様のもの。

(CO65) vous pry のように、動詞の前に印がはっきりと置かれない時は pry または
m' affy を y で終らせるべきである。

(CO66) もし印がはっきりと置かれているならば y は i にかえられて、そして e が加え
られる、例えば：je m' affie, jeo vous prie のように。

この規則は語が y で終る場合は理解されるが、もし語が子音で終る時はあてはまらない。
例えば：je vous manc のような場合である。

* (H69) 所有形容詞の前に冠詞を使う 習慣を理解している 叙述であるが la sue は

son の古形を保存する AN の conservative な側面であろう。

(H19) 13世紀には主に er 動詞 直接法 現在 1 人称単数語尾に e をつける傾向が現われた。3 人称の analogy の e であるが (H18) に示されているように e を加える場合も加えない場合もみられた。語幹が子音に終る動詞には e を付す傾向が AN ではおそかったらしい。

(CO65) 1 人称単数の主語 je が省略される場合, non expresse ponitur signum ante verbum と記されている signum は人称代名詞 1 人称単数主格といういみであろうが, この時は直接法現在 動詞の語尾をことさらに y で終らせよと指示するのは AN の特徴を示している。y と i は互換性のある綴りであったが AN では既述の如く y の綴りが多い。

(CO66) signum (印) というこの場合は je あるいは jeo を指している。人称代名詞を書いても, あるいは省略をして書かなくても e をつけ加えることにはかわりはない。je という人称代名詞がなければ語尾が y の儘で終るといふ叙述は正しくない。主語のあるなしで語尾が変わるといふ指示は誤りである。

(H20) ラテン語の iste (その, pron. demonstr.) ipse (それ自身, pron. intens.) という代名詞 はフランス語では c をもって cil と書かれる。

(CO68) 代名詞 ille (かの, pron. demonstr.), ipse, iste, hic (これ, pron. demonstr.) 等々は c をもって, 単数では cele, cest homme と書き, 複数では celles hommes, cestés と書く。

(H21) しかし suus (3^e pers. pron. poss. sg. 男性), -a (女性), -um (中性) は s をもって son と sa と書かれる。

(CO69) suus, -a, -um は s をもって son と sa [これは単数である, 複数には c なしに sez] と書かねばならない。

(CO70) citra (此方) のように c をもって書くラテン語の言葉は, ガリア語綴りでは変化しない, 例えば: de cea la mear (海の此方) のように。

(H23) そしてその他のところでは cil あるいは il と思いの儘に書けばよい。

(CO71) cil を書いて, それに si が先立つときは cil の c は取除かれ, si の s が il に付加えられる。si cil (もしそれが) は sil と書かなければならず, それは誰かをあらわし, ただ一人を意味している。

(H24) 時に c は s を取るがその時 s は発音されず c のみを発音する, 例えば:

[j]ay resceu (受け取りました) は j'ay re(s)ceu と発音される。

(CO72) 時には c が自らの前に s を取る。しかしその s は発音してはならない。例えば resceu は receu と発音されねばならない。

(H25) また時には *ss* と二重に書かれてあっても単に *s* と発音する。 *puisse* (*pouvoir*, *imp. du subj.*), *fuisse* (*être*, *imp. du subj.*), *eusse* (*avoir*, *imp. du subj.*) のように。

(T15) *quoer*, *cuoir* (心臓) という言葉 は *e* あるいは *o* のどちらを書いてもよい。

(H26) 時には *c* あるいは *q* をさべつなく *cuer* 又は *qoer* のように書きなさい。

(H27) または時には *qi* (*pron. interrogatif*), *cum* (*adv. de comparison*), *qe* (*conj.*) のようにラテン語に従う。

* (H20) *ecce+ille* > *cil* となる。この項は代名詞の語源が理解されていない叙述と言える。 *ipse*, *iste* は *cil* とはならない。

(CO68) *ecce+iste* > *cist* となる。ここにもラテン語の語源を理解しなかったために生じた記述が見える。ちなみに *ceste* は *cist* の女性形 (近称), *cele* は *cil* の女性形 (遠称) である。例文は指示詞の男性, 女性形をとり違えている。CR であれば例文は *cel*, *cest homme* となる筈。また複数で CR の場合は *cels*, *ces hommes* とならなければならない。

(CO69) *suus* の対格 *suum* が *son*, *sua* の対格 *suam* が *sa* となる。複数では *sez* ではなくて *ses* である。 *c* なしにという記述も奇妙に聞こえる。音が同じで, *s* と *c* の混同が起こるのをさげようと意図したのであろうか。

(CO70) *de cea la mear* は AN 綴りである。 *deçà de la mer* となるのであるが *deça* は *ecce hāc* に由来する。語源は *citra* ではない。

(H23) *cil* の系統と *il* の系統の分離が意識されていない。AN における古い用法 *cil* と *il* の併存状態を示している記述と言える。ラテン語 *ille* (>*il*) は指示形容詞と代名詞のどちらにも用いられていたが指示形容詞としては残らなくなった。

(CO71) *si cil* は *sil* とはならない。 *enclise* によって *si+le* > *sil* となり, *si+il* > *sil* となる。

(H24) (CO72) *s* 音をあらわす *sc* 綴りは AN の特徴である。

(T15) *coer* の異形は AN では *quer*, *queor*, *quoer*, *cuoir*, *cuer*, *qoer* など。AN においては [œ] をあらわす綴りが一定しなかった。

(CO46) *qi*, *qe*, *qant* (*conj.*) は *k* をもって書かれるのを常とする。しかし現代の人々の間では *k* が *q* に変えられる。それはラテン語によりよく一致するためである。なぜならば *quando* (*conj.* の時に), *quis* (*pron. interrog.* 誰), *quod* (*pron. qui* の中性形) の中に *k* は現われないからである。

(H28) *k* は人および町の個有名詞において用いられる, 例えば: *Katerine* (キャサリン), *Kyngesmortoun* などのように。

(CO47) 土地および人の個有名詞と、人名においては k をもって書かれるべきである。

例えば：Katerine, dame de Knaptoun (クナップ町の令夫人) [O Kamptoun]

(CO48) car (conj. 何故なら) およびラテン語で q が現われない nam (conj. 何となれば) やその他の語は書く人の意志によって c または q をもってさべつなく書いてよい。

(CO98) 接続詞 que は q または qe と差別なく書き得る。しかし疑問詞として置かれた qi は省略なしに書かなければならない。だが quel と quelle は関係詞として書く。

(C99) ガリア人のように英国人にあっても時に関係詞は接続詞的に用いられる。例えば：the woman that was yesturday at Oxonforde (オクスフォードに昨日いた婦人) or the woman wylke was yesturday at Oxonforde これは即ち：la femme q' estoit ([其処に] いた婦人) [または q' estoit hier a Oxonie] (その人はオクソニイに昨日いた) または la femme la quele estoit hier a Oxonie (オクソニイに昨日いた婦人) となる。

(T10) que または qui は古人の使用習慣に従って k をもって書かれるのを常としたが現代人の間では k は q にかわる。しかし、たとえば次のような個有名詞と人名は除く：Kateryne de Kyrkeby

* (H28) (CO47) (T10) 人名、地名に K の綴りを用いるのは AN の特徴。

(C99) qui は主語、que は属詞をあらわす関係代名詞である。接続詞の que は名詞節を導く。

(H70) 人や土地の全ての名称と地名、さらに職名と尊称をあらわす名詞、この世の支配者たちの約款の始まりは大文字で書かねばならず、特に法令文書においてはそうである。

(C100) 人や土地の名をあらわす全ての名詞、地名、尊称、条文の始まりは大文字で書かれる。

(T16) 全ての個有名詞、貴顕および現世の支配者たちの尊称名は、文の始まりでは大文字を書く。特に法律文書にあっては、語頭は大文字をもって書かれるべきと留意すること。

(H71) 文章の途中で大文字を用いずに一休止しなければならない時は、構成の句読点をつくる。

(C101) しかし文の途中では大文字で始めずに、二つの句読点を打ちなさい。

(CO35) 大文字で書かれた語が小文字で書かれた同一の語と別の意味をもつ時、例えば：un counte counte[e] (訴訟の話)、del Count de tiel Counte[e] (ある伯領の伯爵の) un Roy assist un roy (主が規則を制定する) などがある。

(H80, CO37) 多くの文字が読みとれるあるいくつかの形容詞でなければ、m を除いて如何なる文字のかわりにも省略記号 (titulus) を書いてはならない。また更に習慣的に、例えば datur (衣服の) などのように。

(H81, CO38) ある語の中で省略記号 (titulus) が複数の文字を含む時はいつでも次のような場合を書くのがよい。省略記号をその文字と共に、語がよりよく限定されるような文字の上を書くことによって省略の共通の方法が今日の読者の理解力を完全にし、何等それを不明瞭にしないとき。

* (H70) (C100) (T16) 大文字の使い方を統一しようとする文章法が述べられている。

(CO35) 大文字と小文字の明確な使いわけによって、語の意味が異なることを教えようとする記述は興味深い。

(H80, CO37) (H81, CO38) 省略記号の読み方が曖昧になってきていることを示す記述であろう。

(H82) いつでも n という文字が g のあとで書かれる時は signifiant のように先に書いてはいけない。

(CO39) n の文字が g の前でたとえ発音されても g の直後に続く時は g の直前に書いてはならない、例えば：signifiant のように。

(H83) しかし、もし後に置くのでなければ、前に置かれる。

(CO40) もし n が g の前で発音され、そして後に続かぬ時は g の直前に書かれるのがのぞましい。

(T20) ある語の中で n (m) が子音 g に続くときは n は先立ててはならない、即ち busoignes (必要な物) やその他、同様。

* (H82) (CO39) (H83) (CO40) 硬口蓋子音 n [ɲ] の表記について (H82) (CO39) と (H83) (CO40) の記述は対立し混乱を示している。前者は gn 後者は ng と書くように指示する。この [ɲ] 音がアングロノルマンでは困難な音となっていたのは事実であろう。ngn と n を g の前に書いてはいけないと指示しているようであるが、既述のフランス語教本、Coyfurelly の *Tractatus Orthographie Gallicane* には ngn を良しとする記述がある：

「g はところで語中であって母音と子音の間に置かれると粗 n と g の音を持つ：compaignon, compaignie, moigne, maigne のように。しかしフランス人 (Gallici) は大部分の人たちが語中に n を書く：compaignnon, compaignnie, moingne, maingne のように。この場合のほうが良い。」(p. 17)

英語の音体系に存在しなかったこの硬口蓋子音が AN では早い時期に、口蓋渡り母音に後続する歯音 n となり始めるのである。そして表記には混乱が生じた。

(T20) ちなみに *bosoigne* の異形の例をあげると次の如く多様性を持つ：

busoingne, bozoayne, bosuygne, bosongne, bosuine, bosoinne, using, bosoyng と。

(H84) *meus* (私の), *tuus* (君の), *suus* (彼の) などは男性に付加えられる時は *mon, ton, son* と書く。

(CO41) *meus, tuus, suus* が男性に付加えられる時は *moun, toun, soun* と書かれるべきで, *moun seignour* (私のあるじ), *toun seignour* (君のあるじ), *soun seignour* (彼のあるじ) のようになる。

(H85) 女性に付加えられる時は *ma, ta, sa* である。

(CO42) 女性に付加えられる時は *ma, ta, sa* と書かれるべきで, *ma dame* (私の女主人), *ta dame* (お前の女主人), *sa dame* (彼女の女主人) のようになる。

(H87) 中性における *meus, tuus, suus* は *suum* が動作を受けるものよりも, 行為者としての名詞と一致するときに *son* と書かれる。

(CO43) 中性にそれらが付加えられるとき, 付随するものよりも主体と, または動作を受けるものよりは動作を行うものと一致するとき *moun, toun, soun* は *moun chief* (私の頭) のように書かねばならない。何となれば, ここで *caput* (頭) は主体者の肉体の部分とよばれるからである。

(H88) (*son*) でなければ *sa* である。

(CO44) 主体者よりもそれが動作を受けるものあるいは付属の部分, 二義的な種々の部分に一致するときは *ma, ta, sa* は *ma teste* (私の頭部) のようになる。何となれば, ここで頭は肉体の他の諸部分同様に, 肉体の部分とよばれるからである。

(H77) 単数では *nortre* (我々の), *vostre lettre* (貴方達の手紙) となる。

(CO 45) *noster* (pron. poss. m. 1^{re} pers.) *vester* (pron. poss. m. 2^e pers.) *-ra* (pron. poss. f. 1^{re} 2^e pers.) *-rum* (pron. poss. n. 1^{re} 2^e pers.) は単数では全ての性において *nostre, vostre* と書き, 複数では *nos, vos* と書かなければならない。

* (CO41) *moun, toun, soun* は AN 綴りの特徴である。AN 第二期 (1250年以後) の特徴として O+鼻母音の表記に *oun, oum* が認められる。

(H87) (CO43) まず性の使い方に混乱がある。ラテン語の所有形容詞 *meus, tuus, suus* (男性形) には女性形 *-a* と中性形 *-um* が存在するけれどもこれらのフランス語において中性は存在しない。*suus* の対格 *suum* が *son* となったという記述は正しい。しかしフランス語の所有形容詞の性の一致は所有される人, 物をあらかず名詞の性に対して行い, 所有者の性とは関係がない。故に行為者としての名詞, あるいは動作を行うものと一致する・・・という記述は誤りである。

所有形容詞とそれに続く名詞との関係が十分に理解されていなかった様子である。所有形容詞はそれに続く名詞の性と数と一致するのである。sa mere は彼女の母でもよいし、意味内容から彼の母でもあり得る。この項の記述は英語の his, her の概念をあてはめようとして起っている誤りのように見受けられる。

(CO44) ——動作を受けるもの、あるいは主体者の付属部分、例えば肉体の一部分である頭、と所有形容詞が一致するときは ma, ta, sa となり ma teste となる——という記述も奇妙である。即ちこの項も所有形容詞と名詞との一致を説明しようと試みているのではあるが、名詞の性、数と所有形容詞が一致するという規則がはっきりとは認識されていないのである。possessifs de l'unité と possessifs de la pluralité の関係も明確に理解されていない。

(H92) 母音の i が m と n または u の間におかれるときはいつでも、読み手にとって読み易くするために i を y に変えてよい。

(CO25) i の文字が m と n または u の間に置かれるときはいつでも、その文字が読み易くなるように y に変えることができる、例えば：Comyngtoun のように。

(H96) i と n が二つの音節に分かれる場合は、その間に g を書く、例えば：certaignement (たしかに) のように。

(T17) i が m n または u の直前あるいは直後にあるときはいつでも、更に読み易くあるように、あるいはその本来の性質において存在するように y に変え得る。

(CO92) いくつかの音節をもった語の中で n が i に続くとき g が間に置かれる、例えば：certaignement, benignement (寛大に) などのように。しかし g は発音されるべきではない。

(H97) しかし(i と n が) 同時に音節を作る場合は certain のように g は書かれない。

* (H92) (CO25) i を y に変えようとするのは AN 綴りで好まれる傾向である。

(H96) (CO92) (H97) は AN 風の規則と考えられる。certain の n は鼻音であるから certaignement のように g が介入することはない。綴りは certainement, certain が大方を占めるが AN の作品の中には certeygne の綴りも散見される。例：cele maladie me tout certeygnes heures de jour tut le seen. (*Fouke Fitz Warin* 45.1) benignement の語源は benignus に由来し、g がはいっていた。

(T18) 一音節の語が s で始まる場合、その語は常に完全に書かれる、例えば：sum, si, se, set, そしてその他、同様。

(T19) ガリア人の間では mund (世界) と munt (山) は異なっている。その他、同様。

Orthographia Gallica

- (T21) m がある語で子音 t [l. n?] に先立つときはいつでも、例えば dampnum (破滅) のように p を中に介在させねばならない。
- (T22) 語と語の間の空間はこの n という文字の幅を持つべきであると知っておくこと。
- (T23) 行末でもし必要ならば、語は分節を作ることができる。しかし一音節は決して分離されない。
- (T24) 長い文字が行間の途中まで伸び、語が長い文字を積みこまれているときは省略記号なしに書かれる。例: absconder̄ (隠す), Galfrid^o などの如く。
- (T25) 等しく揃った文字が行ごとに書かれるのであるから、写本の羊皮紙はその上部を折り畳むか、線を引かれるべきである。そして、最初の線あるいはその折り目はまっすぐに整えなければならない。
- (T26) 音節であれ、語であれ 次の文字を書く際には、先行する文字と隣接する文字を考慮しなさい。
- (T27) l という文字が書かれているラテン語の全ての語にあっては、それに由来する同じガリア語において l が置かれなければならない。例えばラテン語の multum (沢山) は molt または mult とガリア語で言われる。

* (T18) 単音節の語では略字を使用してはいけないという、写字生に対する注意であろうか。

(T19) OF においては一般に語尾の d と t は交換可能であった。

(T21) 鼻子音が続くとき p を介在させるのは OF 中世後期の特徴である。その傾向を多少先取りしている模様である。

(T22) (T23) (T24) (T25) (T26) 専ら写字生に対して文章の書き方の説明を行っている。(T24) Galfrid^o は主格の us が省略されていると見られる。absconder も absconderunt となるのであろうか。

(T27) 語源にさかのぼれという意識がみえる。l は u 音になっているからこの考え方は hypercorrection と見做してよい。いわゆる mots demi-savants である。

[小論の一部は日本中世英語英文学会第2回全国大会に於て発表 1986.12.6]